

110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(3)

講題：司法通訳のための応用実務入門

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 3 回は、本校日文系教員蔡珮菁副教授による「司法通訳のための応用実務入門」である。本講座で蔡教授は教員、学生にどうすれば司法通訳という仕事に就けるのかを紹介し、さらに実際にオファーを受けた時にすべき準備作業について講じてくれた。

最初に蔡教授は「司法通訳」が 2009 年に始まった規定であることに言及した。国際人権条約に基づき、執法機関は聾啞者および中国語を解さない者に無償で通訳を提供し、その訴訟権益を保障しなければならない。司法通訳担当者には基本的な法律知識、中上級レベルの外国語能力を備えることが求められる。蔡教授は本校日文系で中日通訳課程を長年担当し、司法通訳もその課程内容の一部となっている。また自身の経験を強化するために、台湾司法通訳協会の養成コースに参加したり、東呉大学推広部で刑法、刑事訴訟法を 8 単位習得しており、司法通訳に必須の基本的法律知識の具備という条件にもマッチしている。蔡教授は 2017 年から地検署特約通訳を担当し、その後台湾司法通訳協会の人員養成コースの教員も務める。そして、もっと多くの人々に司法通訳を理解してもらうために、大学教員という社会的責任に力を尽くす一方で、この仕事にも奮闘している。

どうすれば司法通訳の仕事に就けるのか

主に募集と養成コースの二つの道がある。各審級の法院、法律扶助基金会は必要とする言語に対し不定期に特約通訳を募集している。日本語通訳の人数はすでに足りており、現在求められる対象は主に東南アジアの言語である。台湾司法通訳協会の養成コースは、基礎倫理、行政訴訟類、刑事民事類、実務演習各 8 時間を含む。通常の授業方式の他に、VR 教学ビデオがあり、警察局等で司法通訳が直面する状況をシミュレーションするなど、教学方式はかなり進んでいる。

実際にオファーを受けた時にすべき準備作業

実務応用で必ず注意すべきことは二つある。まず司法通訳としての倫理規則の遵守。司法通訳の基本倫理には次のものがある。無関係者であること、秘密厳守、自らオファーを求めない、中立保持、通訳以外の役割を行なわない、能

力を越えた仕事は辞退することなど。さらに実務執行規程の貫徹である。それらは次のように分けられる。

1. 執務前：案件タイプの確認、被通訳者と面識があるか否か（人身安全上の問題）、翻訳言語に習熟しているか（同一国の人間でも方言を使い、コミュニケーションがまったく成立しないことがある。例えば、インドネシア語とジャワ語の違い）を必ず確かめる。
2. 出頭：開廷の1か月から2週間前に召喚状を受け取り、案件担当の書記官と連絡し、事前に案件内容を把握しておく。身分証、召喚状、派遣機関の制服（開廷前に着用）の準備、時間通りに開廷所（法廷もしくは捜査機関）に到着すること。法院に入る際に金属探知器などのセキュリティー・チェックを受ける。提出された戸籍資料を記憶し、情報漏洩を防ぐ。
3. 執務開始時：執務の前に宣誓し、開廷時には携帯の電源を切る。司法通訳は基本的に逐語訳によって進める。もし個人の習慣などで筆記が必要な場合には、必ず裁判官、検察官の同意を得てから、筆記用具を受け取る。使用した紙やペンは閉廷後回収され、法廷外に持ち出せない。被通訳者とは適切な距離を採り、自身の安全の確保に注意する。筆録する場合、必ず内容の正確なことを確認し、サインする。
4. 閉廷後：裁判官、検察官に領収書にサインしてもらい、出納係で通訳料を受け取る。費用は時間ではなく案件で決められる。およそ千から3千元なので、それのみで生計を立てるのは難しい。

蔡教授は市販の法律書籍が紹介する法廷のシミュレーションを用い、開廷時に起こりうる状況を説明してくれた。同時に、検察官の仕事を紹介するビデオを見せ、開廷時の状況、被害者への質問の様子など、裁判の進行過程を理解させてくれた。教師と学生に対し、もし司法通訳になったら、どのような問題に直面するかを想像させた。講座の最後に蔡教授は、司法通訳によって尋問はスムーズに進み、裁判において大変重要な役割をはたすことを強調した。台湾の司法通訳はさらに多くの人材を必要としており、今回の講座で皆が司法通訳の仕事を理解して、適切な人材を選び、募集に応募し、また養成コースに参加すること、そして司法通訳の一員となることを期待している。

(Web サイト: <https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿: 鍾季儒 日文系・助理教授)

(日本語訳: 塚本善也・日文系副教授)